

<サントリー学芸賞の受賞にあたっての感想と今後の抱負>

このたびは、サントリー学芸賞を頂きますことを、大変光栄に存じます。拙著を選んでくださった審査委員の先生方、こうした受賞の機会を設けて下さったサントリー文化財団の皆様、心より御礼申し上げます。またこれまで支援して下さいました先生方・先輩方、同輩の皆様、今回執筆の機会を下さった中公新書編集部の皆様、私に研究・教育の場を与えて下さる愛知県立大学の皆様、常日ごろから私を支えてくれる家族にも、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

先日は、田所昌幸先生から過大な選評を賜り、また本日は北岡伸一先生の的確なご批評を伺いました。北岡先生のお話を伺っていて、ふと指導教官の高橋進先生から、お叱りを頂いているような錯覚に陥りました。北岡先生と高橋先生とは、同じ学部出身の同世代でいらっしゃいます。拙著は、歿後十年あまりの高橋先生に献呈されたものですが、国民国家が欧州統合のなかで克服されることを切望していた高橋先生であれば、拙著には更に厳しいご批評をされたのではないかと思います。

拙著『ドイツ・ナショナリズム』は、「普遍」を称する思想が、権力闘争の武器として用いられた結果、その反動として「固有」を称する思想の擡頭を招き、そのことが更に「普遍」側の攻勢を招くという、思想の相剋を描いた、歴史的潮流の解釈提案でありまして、私なりの歴史哲学の試みだと考えております。私は、ナショナリズムとは「普遍」対「固有」のせめぎあいの中で延々と再編されるもので、今後もなくなることはないと考えています。こういった見方は、世界の様々な地域に適用できると考えておりますので、これからは幅広く、世界史の解釈提案をしてまいりたいと考えております。

コロナ危機も未だ続いておりますので、皆様にはご自愛頂き、よいお年をお迎え板きたいと存じます。

<受賞者挨拶>

いまサントリー学芸賞を頂きまして、大変感激しております。改めて、同賞関係者の皆様、先生方・先輩方、同輩の皆様、愛知県立大学の皆様及び家族に謝意を表する次第であります。

私にとってナショナリズム研究とは、権力、あるいは国家というものを見つめ直す営みに他なりません。私がかつて受けた教えによれば、権力とは打倒すべきもの、国家とは克服すべきものであり、ナショナリズムの愚かさを世に知らせるのが、研究者の教育的使命だということでした。しかし生来の天邪鬼である私は、マックス・ヴェーバー研究を経由したこともあって、ナショナリズムという理念、あるいは政治という営み、権力や国家というものを、もう少し冷めた目で、人類の歴史の中で見詰めたと思うようになり、ナショナリズムの思想史的分析という、いまの手法に行きついた次第です。

ただ困ったことに、拙著は刊行後一年で、早くも時代遅れになってしまいました。2022年2月24日にロシア・ウクライナ戦争が始まり、12月7日にはドイツで連邦議会の襲撃計画が摘発されまして、事態が刻々と変化しています。今後はそうした変化も視野に入れ、現地ドイツでの見聞をも踏まえて、新たな分析を披露していきたいと思っています。

(2022年12月12日：東京會館)